
海と陸との繋がり

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海と陸との繋がり

【Nコード】

N3088F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

故郷に帰ってきた聖。見慣れた海にやってくると、旧友で人魚のクリスティーナと出合った。彼女が人を襲っているという噂を耳にしていた聖は…。

海と陸との繋がり（１）

じりじりと照りつく日差し。

それはひどく白い肌に突き刺さる。

生暖かい潮風が髪を撫ぜた。

ベッタリとする感覚。鬱陶しそうに女は長い黒髪を払い除ける。

湿気が高いのか、額から汗がにじみ出ていた。

「まったく、何なのよいったい。」

女は白いスカーフを首に巻き、サングラスを光らせて不機嫌に言葉を吐いた。

砂浜の向こうに海を見、コンクリートの上で仁王立ちをしている彼女の服装は、

海に似合わないきつちりとした白いスーツである。

道行く人が怪しすぎる彼女を見るが、

当の本人はまったく気にせず、にぶちぶちと文句を垂れている。

彼女の名前は聖^{ひじり}。顔は美人で街を歩けば誰もが振り返る。

しかし、性格は高飛車でプライドが高く、自己中心的。

典型的な美人な性格ブスと周りから言われていた。

「あの子達がそんなことするわけじゃないじゃないっ。」

しかし、田舎に帰って来た彼女はそうでもないらしい。

見知った名の噂話を聞いて、わざわざ嫌いな海にまでやって来たのだから。

まだ不機嫌に愚痴りつつも、彼女は砂浜に降り、海へと勢いよく歩いている。

その度に高いヒールは砂に埋まった。

「だいたい、皆臆病すぎるのよ！」

噂を思い返す度に聖は眉を潜め、苛立っていた。

それが足の速さを更に速めている。

海につくなり、聖は固まった。

目に入って来た光景にさっきの怒りも忘れ某立ちになっている。

「あ、ひじりちゃんだ！」

聖よりも高い声が彼女の名を呼ぶ。

海に下半身を埋め、赤い水着で胸を隠す少女は、彼女につこりと微笑みかけた。

手には大きなビーチボールを抱えているから、遊んでいたのだろう。

「どうしたの？」

まったく反応を返さない聖に、

金髪のふわふわとした髪を潮風になびかせながら少女は首を傾げた。きょとんと自分を見る童顔をサングラス越しに見て、聖はわなわなと震えだした。

そして彼女に怒りをぶつける。

「どうしたの？ じゃないわよ！ このアホ半魚人！！」

「ひつどーい！ 私は半魚人じゃなくて人魚よ！！」

聖の言葉に直ぐ様反論をし、元から丸い頬をさらに膨らませ、下半身でバシヤリと水を巻きあげた。

ほんの少し、かい間見れた下半身は魚のような尾びれだった。

それに聖は驚いた様子も見せはしない。

それもそのはず、この人魚、名はクリステーナ。

愛称はクリスといい、聖とは昔からの知り合いなのだ。

「人魚も半魚人も同じようなもんでしょ！」

水しぶきが上がった箇所を眉を潜めながら見る聖。

また、まだ怒りは収まらないらしく、声を張り上げている。

「何でよ！？私と半魚人様じゃ比べものにならないじゃない！」

クリスも負けじと怒鳴り返す。

彼女の言葉に、聖は額に皺をよせた。

「様あゝ？」

「そうよ。半魚人様は私達が遠く及ばないほどカッコイイの……」

なんといつても私達の夢は半魚人様と結婚すること。きや、言っちゃった。」

「黙れウカレポンチ。あんたの趣味がイマイチ私にはわからないのよっ。」

うつとりと夢見る乙女になっていたクリスに、すかさず聖は突っ込みを入れた。

クリスはそれに不満らしく、尾ひれをばたつかせながら抗議の声をあげている。

聖は手をクリスに向けて、彼女を制した。

「クリス。今日は遊びに来たんじゃなくて、貴方に聞きたいことが

あつて来たの。

おふざけは辞めにしてくれるかしら？」

「ごめん……なに？」

いつになく真剣な聖に、クリスは少し浮かない表情になる。
彼女は口をへの字に曲げ、目だけで聖を見ていた。

「貴方、この海に来る人間を襲ってるって本当なの？」

嘘だと言つて欲しい。本当のわけがない。

聖はそんな言葉をいつの間にか心の中で唱えていた。
ただ単なる噂であれば、それで全てが片付くのだと。そう信じて。

「本当よ。」

しかし、クリスの答えはその期待を裏切った。

聖は目を見開いてクリスを凝視する。

また、クリスは気まずそうに視線を斜め右下に落とし海を見つめている。

風が彼女達の髪をなびかせ、太陽の光がじりじりと彼女達を突き刺す。

青い空ではカモメが飛びながら鳴き交わしている。

聖にとつて、過ぎ行く時間はとても長く、永く感じられた。

「……どうして？貴方、私を助けてくれたじゃない。

そんなことするような奴じゃっ……ないじゃない!!」

聖は信じたくなくて、自分に言い聞かせるように叫んだ。
クリスを見ることができずに下を向いて。

クリスと聖は幼い頃に出会った。

それは、聖が父親について海へ遊びにきた時のことだ。
お決まりのごとく、彼女は泳いでいる最中に波に浚われてしまったのだ。

そこで聖が見たのは父親ではなく、

透き通るようなエメラルドグリーンの瞳と、

水に濡れているにもかかわらずふわふわとした金色の髪、

エラのような海と同じあおい耳。

そして、自分に向けられた笑顔だった。

それが聖には今でも忘れられないクリスの印象で。

聖母のような柔和で優しい笑みが聖にとって彼女なのだ。

それとはまったく逆の彼女の答え。

それは聖にとつて、とてもショックなことだった。

そう、憧れが打ち砕かれたような、そんな感じの。

「……聖ちゃん。聖ちゃんは海が怖いよね？」

聖の問いに答えず、クリスは聖に聞いた。

その声からは何を考えているのか読み取ることができず、聖は眉を潜めた。

「そうよ……溺れてから怖いわ。苦手よ。

海の青が視界に入るたびに、

海のさざなみが耳に聞こえるたびに、

潮風の匂いがするたびに、

身がすくむ思いだわ。」

聖は息をゆつくりと吐きながら、正直に答えた。声は震えている。

「……私ね。人間が怖い。」

「聖ちゃんが海を怖いように、私は人間が怖い。」

クリスのその言葉に、聖は何を返していいのか戸惑った。しかし、クリスもまた、聖同様に自分の気持を正直に述べている。二人とも相手に嘘をつきたくないのだ。

聖が黙っていると、心の中で自問自答を繰り返していたクリスが首を横に振った。

聖はなんとも言えない表情でクリスを見守っている。

「ううん……正確には違う。私が怖いんじゃないの、私の友達が怖がってるの。」

クリスは顔を上げ、聖をじっと見つめた。

どうやら答えが完全に出たらしく、エメラルドグリーンの瞳に迷いは感じられない。

「……友達って？」

聖は見つめ返した。そして、クリスの次の言葉を促す。

クリスは聖から視線を外し、そっと海の中から手を出した。

白い小さな手に、ちよこんと申し訳程度に白いマリモが顔を出す。

「うみちゃん。」

その白い毛に覆われた小さなマリモを見て、聖は名を呼んだ。

うみちゃんと呼ばれたそれが、返事をするかのようにもそそとクリスの手の上で動く。

聖が懐かしそうにうみちゃんを見て微笑むのを見て、クリス眉を潜め苦笑った。

そして、躊躇いながらも聖に話出す。

海と陸との繋がり（2）

「海坊頭のうみちゃんね……人間の子供に仲間が殺されたの。その子、まだ巨大化することできなかったんだって。食べるわけでもないのに、気味悪がられて殺されたのよ。」

「……だったら尚更じゃないっ。

貴方がそうやって人間を襲ってたら、気味悪がられるわ！怖がられるわ！！

そしたら、誰かが貴方を殺しに来てしまう……。」

クリスの言葉は、聖にもよくわかった。

だけど、クリスがしていることは自滅に近い。

そう思ってしまうと焦りと、クリスがいなくなるのではないか。という不安が聖に襲ってきた。

聖は両の手で顔を多い隠す。

カタカタと肩を震わせながらなんとか耐えるような形で。

「聖ちゃん。人間はね、繋がりを壊すの。

自然との繋がりも、他の生き物との繋がりも。

全部、全部。壊してるんだよ。私も、もうここにしか居られない。」

クリスは聖に言われたことにまったく触れようとはしなかった。

まるで、わかっているのだと。そういった感じで。

けれど、淡々とした口調は聖に何も読み取らせてはくれなかった。聖はサングラスを外して涙を拭い、黒い細い瞳がクリスを捕える。

「どうということ？」

聖はクリスがこの世界の住人でないことを知っていた。だからこそ最後の言葉が気になったのだ。ただ、海の中の別世界の住人と聞いたことがあるだけで、聖は本当のところ彼女がどこに住んでいるのかは知らない。毎日この浜辺にいるわけではないことからして、少なくとも何処かに家はあるだろう。

「聖ちゃんには、まだ教えてなかったね。」

やっとクリスは笑んだ。その笑顔は無邪気で楽しそうだ。それにつられて聖も笑む。

「海が私の世界と聖ちゃんの世界を結んでるの。」

「海が？」

二人とも、さっきまでの緊迫した雰囲気はどこへやら。今では楽しいおしゃべりになっている。

それは、クリスが自分の秘密を聖に話すという親しみ感から来るものなのか。

それとも笑顔の効力か。どちらにしても和やかな雰囲気である。

「海って鏡みたく風景を映し出すでしょ？」

あれがね、本当は別世界に通じてるの。

よくよく見れば違うところに気付くはずよ。」

「うっそー。まったく信じられないわ。」

クリスの言葉に驚きながらも批判の声を上げる聖。今までに聞いたこともない事を容易く信じることは難しいようだ。

聖はとめどなく流れる汗を拭いながら上着を脱いだ。
じりじりとする暑さに耐えられなかったのだ。

「嘘じゃないよ。」

ただ、繋がる場所は狭いし、繋がってる時間も短いことが多いから
見つかり難いのっ。

「屋気楼って知ってる？」

「馬鹿にしないでよ。そのくらい知ってるわ。」

温度さがあまりに違ったりすると、光の屈折でその場にはないものが見えるのよ。」

「陸のはそうかもね。」

「ただど海のそういった現象は少なからず違う理由もあるのよ。」

自信満々に答える聖の鼻頭を折るように、クリスは人差し指を振って否定する。

聖は、口をへの字にし何よっ。という顔でクリスを見た。
それに促されたのか、クリスは言葉をつむぐ。

「あれは私の世界の船よ。」

一瞬繋がったその場所に、私の世界の船があったの。

「あ、信じてないね？」

眉をびくびくと動かし、口を引きつらせてる聖を見て、クリスは頬を膨らませた。

「消えちゃう船とかあるでしょ？」

「あれだって私の世界に迷い込んだりしてるんだからっ。」

さらに続けるクリスに、聖は呆れたように溜め息をついた。

「いいわ、百歩譲ってそれを信じてあげる。

それで？なんで貴方は此処にしかいられないの？」

クリスを急かすように聖は問うた。

その言葉は一瞬で場を氷つかせた。緊張が走る。

重々しくクリスは口を開いた。

「私の世界とここの繋がりが絶たれようとしているの。」

「……。」

「っ……海が汚れたから！海を人間が汚したからよっ！！

海は汚れて光を失った。

海は、何も映さなくなったのよっ！」

セキを切ったようにクリスは叫ぶ。

大きな瞳からボロボロと涙が溢れ落ちた。

聖はただ黙ったままクリスを凝視している。

聖は、胸が締め付けられた。

胃がぐるぐると回って、見ているのに何も認知できないでいる。
ただ彼女の頭の中は真っ白になったのだった。

「ねえ、クリス。それならなんで貴方は此処にいるの？
帰れなくなる前になんで帰らないの？」

頭は何も考えられないのに、疑問が口をついた。

聖は自分でも戸惑ったように眉を潜める。

クリスは涙を溜めた目で聖を睨みあげる。

それに聖は圧倒され、口をつぐみ生唾を飲んだ。

「このまま帰るなんてできないよっ。

人間に復讐してやるんだっ。

海との繋がりを壊した奴らを、私は許せない！」

そう強くクリスは訴えた。人間である聖に向かって。けれど、聖は自分に何ができるのかわからなかった。

ただ、人間はたかが一人何かを訴えても、何かを変えることは難しい。

そう聖は大人になって確信していた。

約束なんてできない。

きつと海を綺麗にするなんて。

「クリス……ごめんなさい。

私には貴方に止めてと言うことしかできない。お願いだから……。」

考え直して。と小さく続け、聖はクリスに背を向けた。肩が小刻に震える。

「明日……また来るからっ。」

聖はクリスが声を発する前に、それだけ言っ駆けて行った。

聖が走りさった後には、涙で濡れた少しの砂と、

寂しげに見送るエメラルドグリーンの瞳があった。

海と陸との繋がり（3）

夜中、聖は久しぶりの自分の家の自分の部屋で寝返りを打っていた。この家は今は聖しかない。

聖の親は他の家に住んでいた。それは、今も昔も同じこと。

静かな部屋で、うつすらと目を開け。聖は考えていた。

クリスは、いつからそうやって考えていたのだろうか。

いつから……あんな顔をするようになったのか。

今も人を襲ってるのだろうか。いろんなことが頭の中を駆け巡る。

布団に入ってから、もう数時間が経過していた。

それなのに、疑問はひっきりなしに聖の頭の中に浮かび上がっては消えていく。

だから、寝付けなかった。

「~~~~っ……」

幾度目かの寝返りを打ったその時、微かに聖の耳が音をキャッチした。

すぐさま飛び起きる聖。そのまま、上着を手にとると家から飛び出した。

聖の家は、海からそう遠くない場所に位置していた。

少し坂道を駆け下りれば、海が見えてくる。

小さな明かりが聖の目に入ってきた。数人の男が何かを喚いている。

聖の心臓が大きく鳴り響く。

もしかしたら。そんな言葉が彼女の頭の中を繰り返し駆け巡った。

荒い息をしながら、それでもスピードを落とさずに聖は走る。

明かりが段々と大きくなる。

次に目に入ったものに、聖は心臓が止まりそうになった。

「っ……嘘。嘘、ウソ、うそうそうそ!!」

小さくウソと連呼する。

やっとのことで、明かりの近くまでやってきた。

もう、肩で荒く息をして、喉がカラカラに渴いている。

クリスが、漁をするための縄に捕らわれて岸に上げられていた。魚のような尻尾が松明と月明かりで照らされている。

その周りにいる男達。

何もかもが自分が想像したとおりで、聖は腰が抜けそうになった。

「クリスっ。」

小さく彼女の名を呼んだ。クリスはゆっくりと顔を上げる。

涙目で、それでも聖を見るとにっこりと笑った。

「やっぱりね、私。人間の考えることがわからないよ。聖ちゃん。」

クリスは声は出さずに、口だけをそう動かした。それをわかったのは聖だけ。

「あんた達、クリスを離しなさいよ!!」

息を整えて、叫ぶ。しかし、駆け寄ろうとした聖を二人の男が捕まえる。

「なんだ？聖。お前、この化け物の仲間か？」

嘲笑うかのように一人の男が言った。聖はそいつをキッと睨みあげた。

「違うつ。友達よ！化け物なんかじゃないわ！！」

「はは、頭おかしいんじゃないの？化け物が友達だってよ。」

聖を掴んでいる男が、彼女を見下しながら言う。

それに聖は一生懸命に横に首を振った。

「化け物じゃないつ。クリスは、クリスは良い子なのっ！

私を助けてくれたんだから！！」

「化け物だよ。お前、妄想じゃないのか？

こんな奴が人を助けるわけないだろ。」

「そうさ、助けるどころか食われちまう。」

「美味しく食べるために肥やされてたんじゃないの？」

聖の必死の訴えに、男達は口々に罵りの言葉を投げる。

聖は絶句した。

自分がどれだけ訴えても、こいつらの考えることを変えることができない。

そう思ってしまったから。

しばらく固まっていたが、助けを求めるように視線を動かした。

目に付いたのは、弱弱しく自分を見るクリスだった。

それと同時に心の中で何かが弾ける。

「離して！！！」

必死にもがいて男達の手から逃れる聖。
そして地を蹴ってクリスに駆け寄った。

近くで見ると、クリスの肌には無数の痣や切り傷が目につく。彼女を助けなければ。その想いが聖の心の中でこだまする。

しかし、それは既に遅いことだった。クリスの身体が段々と透き通っていく。

男達は聖の覇気に蹴落とされ、呆然と二人を見ていた。

「馬鹿つ。陸になんて上がったらあんた。死んじゃうじゃないっ！
」

聖はクリス抱きかかえようと手を伸ばす。

しかし、クリスはその手を払いのけた。

それに聖は小さく声を出し、目を見開いてクリスを見た。

そして。なんで？と小さく呟く。

もう、クリスの身体は段々と泡になっていた。

「いいの。もう遅いもん。

これで少しでも海を汚さないで。っていう想いが伝わればいいなあ。

」

いつもみたく、あどけない笑みを浮かべるクリス。

その笑顔から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

聖は、無意識のうちにもう一度手を差し伸べて、クリスを強く抱きしめていた。

聖の目からも涙がこぼれ落ちる。

何かを言いたいのが、言葉にならなくて。聖はただ嗚咽をもらすだけ。

「聖ちゃんの心にも残れてよかった。ありがとう。大好きだよ。」

小さく耳元で、クリスは聖にそう言った。

その瞬間、聖はクリスの温かみを感じることができなくなっていた。聖の手にある感触は、冷たい泡だけ。

「クリス！クリスティーナーッ！！」

聖は叫んだ。涙がとめどなく溢れて自分では止められない。胸が痛い。

何かが突き刺さってるみたいで。また締め付けているみたいで。呼んでも返事は返ってこなかった。

聖は、ぎゅっと残った泡を握り締める。

クリスはもう戻ってこないんだ。と頭の中で鳴り響いた。

「クリス……生きてて欲しかったのに……。」

誰にも聞こえないほど小さな言葉で、聖は呟いた。

そして、嗚咽を噛み殺し、涙を拭くと、ずっと立ち上がった。

男達が何かを言っているが、それは聞こえない。

ただ一言。聖は男達に言った。

「化け物なんて、本当はいないのよ。」

冷たい印象を与えるくらい、彼女の言葉は軽蔑に満ちていた。

男達は絶句し、それ以上彼女に何も言わなかった。

それから聖は、自分のうちへ早足で帰っていった。

もうすぐ日が昇に帰る時間だ。

けれど、聖にはそんなこと関係なかった。頭の中はただ、クリスのことばかり。

海と陸との繋がり（４）

聖は家ると、すぐさま洗面所へ駆け込み顔を洗った。

どれだけ洗っても、涙は次から次へと溢れてきりが無い。

仕方無しにタオルで顔を力いっぱい拭くと、台所へ駆け込んで何かを探し始めた。

見つかったのか、ゆつくりとソレを握る。

握ったものはナイフだった。握った手に力が込められる。

ばさっ

聖は長かかった黒髪を無造作にナイフで切り落とした。
肩よりも上になった髪。

「馬鹿っ。馬鹿、バカバカバカっ……。」

ナイフを置き、その場に崩れ落ちる。

小刻みに肩を震わし、頬を暖かい涙が伝う。荒く息をして、ため息をついた。

「……くそっ。男に戻ったって……約束したあんたがいないなら。
意味ないじゃんかっ。」

聖とクリスは、ある約束をしていた。

それは二人がであって間もない頃。

聖は、ナイフを握ったまま、ぼーっと、クリスとの思い出を思い出す。

「聖。ひどーい！何でわっかんないの！？」

「俺は男だっ。そんなんわかるかよ！」

あの日、聖とクリスはいつものように浜辺で言い合っていた。
半魚人様を思う乙女心について。で。

「なによ、なんでわかんないの！？」

クリスが尚も抗議の声をあげる。聖は困ったように考えた。
いつもだったら、聖はその後を誤魔化して、遊ぶほうへとクリスを
誘導する。

しかし、この日はちがかった。

「なってみなけりゃ、何もわかんないよ！」

乙女心何て、女の子になんなきゃわかんないっ。」

思わず出た言葉だった。

それでも聖は、我ながらによくできた答えだと言い終わった後に思
ったりもする。

しかし、実際は自分の首を絞めることになるのだが。
次の思いもかけないクリスの発言のせいだ。

「そっか。じゃあ、聖。女の子になって！」

「はあ！！？」

につこりと笑顔で言うクリスと、それに思わず驚きの声を上げ目を
点にする聖。

いきなり何を言うんだ。と聖はクリスを凝視する。

「お、男が女になれるわけないだろ！」

必死にクリスに言うが、彼女はにっこりと笑ったまま。その笑みに不気味さを感じて、聖は一步後ずさった。悪寒が走ったのだ。

「大丈夫だよ。聖に私が神様にお願いしてあげるから。神様はね、私たちのお願いを一つ。聞き届けてくれるんだよ。今度から聖ちゃんって呼ぶね！」

やっぱりいつもの笑顔のまま言うクリス。

聖は身の危険を感じギギと身体を後ろに向ける。

「聖。やっぱりダメかな？ 私ね。聖にも私の気持ち、わかってほしいの。」

だんだんと小さくなっていく声に、聖は耐え切れなかった。今度は勢いよくクリスの方に振り向き、大声で叫んでしまった。

「いいよ！女にしろよ！！クリスの気持ち、わかってやるよ！それで、クリスの気持ち、わかってやる！約束だ！！」

次の瞬間だ。目の前が真っ暗になったのは。それから自分は女になった。元に戻るのには、クリスの気持ちをわかったとき。

それが、クリスが死んだとき。

聖は昔を思い出して鼻で笑った。

昔からクリスは突拍子もないことを言ったりやったりするのだ。

それを、昔はなんの抵抗もなく信じてた自分を懐かしく思う。
もう、そんなふうにはクリスと話せないのかと思うと、
胸が締め付けられ聖はまた涙が溢れてきた。

コンコン

ドアが叩かれる音がした。

聖は起き上がり、涙を拭う。そして、首を傾げながらドアへと向かった。

この家に人が尋ねてくることなんて滅多に無いのだが。
それにだいたい、今は誰とも会いたくなんかなかった。

コンコン

しかし、焦らすようにまたドアが叩かれる。

聖は、仕方無しにゆつくりとドアを開ける。

日が昇り始めていた。影でドアの前に立っている人物が聖にはよくみえない。

「……………何のようです……………っ!？」

ゆつくりと上がる日差しのおかげで、段々とその人影は形を成す。
ふわふわな金髪に、エメラルドグリーンの大きな瞳。あどけない優しい笑顔。

クリスのようだった。だけど、聖は苦笑った。
クリスがいなくなったことで、あまりにも寂しくて幻想でも見てる

んだ。

と自分に言い聞かす。クリスは人魚だ。人じゃない。

目の前の女の子は人間の耳に白いワンピースから人間の足が見える。

「……こんな朝早く、何のようですか？」

「何を、そんなにしよげているんですか？」

少女は率直そう言った。その言葉に、聖は眉を顰めて彼女を見る。

少女は笑ったままもう一度、どうしたんですか？と聞いてくる。

聖はじつと少女を見た。見れば見るほど、彼女はクリスにそっくりで。

「……友達を一人。守れなくてね。」

不思議と聖はその子に話し始めていた。

本当は、話すつもりなんてない。

とそう思いながらも、口から出る言葉は止められない。

「私が、たった一人で何を言っても、受け入れられないんだって実感して。」

私一人じゃあ、何も変えられないんだ。って絶望したんだよ。」

一気に言ってから長いため息を吐いた。

しみじみと夜の出来事をかみ締めて、また痛い思いが込み上げてくる。

目頭が熱くなるのを、聖は必死に抑えていた。

「そんなことないよ。聖ちゃん。聖ちゃんの思いは、神様と私に届いたよ。」

聖は名前を呼ばれたことにびっくりして彼女を凝視する。
いつもと変わらない、記憶と同じ笑顔がそこにあった。

聖はぽかんと口を開けていたが、いつの間にかその口は綻んでいる。

「……クリス。クリステイナー？」

「そっだよ！聖ちゃん！！」

笑顔で、答える彼女。口が綻ばないようにと必死に抑えながら、聖はまた聞いた。

「本当にクリス？」

「そっだよ！ほら、うみちゃんも一緒なの！」

そう言っ、手の中を見せる彼女。

その手の中には小さくてもそもそと動く白いマリモ。
もというみちゃんが静かに彼女の手に包まれていた。

「うみちゃん！……クリス。クリスなんだね！おかえり！！」

「ただいま、聖ちゃん！！」

目の前の少女は聖に勢いよく抱きついた。

いったいどうなったのか、聖はまったくわからずに目を白黒させる。
それでも、自分の名前を呼ぶ彼女が、クリスなのだと。そう実感して抱きしめる。

クリスは抱きついたまま嬉しそうに言った。

「あのね、あのね。聖ちゃんがずっと前に言ったじゃない。なってみなけりゃわからない。って。」

あの言葉よ。私と神様に届いたのは、あの言葉なの！」

興奮気味に大きな声を耳元で喚かれ、聖は頭がくらくらした。でも、元気な聞きなれた声を聞いて、笑顔がこぼれる。

「クリス、それはどういうこと？」

「聖ちゃん。女の子になって、女の子の気持ち判った？」

首を傾げて聞くと、まだ興奮気味にクリスは聖に問いかけを返した。クリスがじつと聖の瞳に目を合わせる。

「そうだなあ。クリスの気持ちはわからなかったけど、聖ちゃん。って女の子の気持ちはわかったよ。うん。そう、わかったんだ。」

聖も嬉しそうにクリスに返す。

「そう、それならいいのっ！」

だからね、私も人間になってこい。って。そう神様が言ったの！

聖、貴方一人の、たった一つの言葉よ！！

それにね、もう一つ。聖ちゃん言ったよね。私に生きてて欲しかった。って。」

また、嬉しそうにクリスはぎゅっと聖に抱きついて耳打ちする。

最後の言葉はそう、クリスが消え去った後にぽつりと聖が呟いた言葉だ。

聖は、恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「聖、おかえりなさい。」

「ただいま。」

抱きしめ返して、聖は思った。

たった一人の人間でも、

たった一つの言葉でも、

それだけで何かが変わることがあるんだって。

何も変わらないとその時は思っても、

見えないところで変わったり、

何年後にもなって変わる事だってあるんだ。と。

なにせ、この後。海はゆっくりと綺麗になっていったんだから。

聖とクリスと、皆なの手によって。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3088f/>

海と陸との繋がり

2010年10月28日06時30分発行